

8月 2013 のアーカイブ

- 2013/08/31 [国家世俗化とキリスト教墓地問題](#)
- 2013/08/30 [インドはネパール 76 番目の郡 : Nepali Humor](#)
- 2013/08/24 [トニー・ハーゲンのネパール記録映像](#)
- 2013/08/23 [対ネ最大投資国, 中国](#)
- 2013/08/22 [講演会 : ネパールを知ろう !](#)
- 2013/08/21 [宝塚のネパール料理店 : リバジャ](#)
- 2013/08/19 [京都の米軍基地\(16\) : レイセオン下請以下の参与会意見](#)
- 2013/08/14 [京都の米軍基地\(15\) : 受け入れ 10 条件](#)
- 2013/08/11 [「風立ちぬ」 : ごちゃまぜ中途半端](#)
- 2013/08/10 [焼身抗議死報道の自己規制](#)
- 2013/08/08 [紹介 : 『長岡信治遺稿集』](#)
- 2013/08/07 [紹介 : 『ナラク ゴビンダ・マイナリ獄中日記』 \(2\)](#)
- 2013/08/06 [鳥インフル : 無防備な近郊養鶏場](#)
- 2013/08/05 [紹介 : 『ナラク ゴビンダ・マイナリ獄中日記』 \(1\)](#)
- 2013/08/02 [京都の米軍基地\(14\) : 受け入れ方針合意](#)

国家世俗化とキリスト教墓地問題

キリスト教墓地問題は、一応の決着がついたかに見えたが、いつものように政府の約束は言葉だけで、実行は棚上げらしい。

[レグミ内閣とキリスト教墓地問題](#)

[キリスト教墓地要求, ハンストへ](#)

[キリスト教墓地問題検討委員会発足](#)

[クリスマスと墓地問題](#)

[墓地紛争:キリスト教vsヒンドゥー教](#)

▼[キリスト教墓地問題一覧](#)

1. 深夜の無断埋葬

カトマンズ・ポストのアンキト・アディカリ「拒絶された墓地」(8月23日)によれば、ネパールのキリスト教徒は、墓地を拒否され、死者の埋葬ができず、切羽詰まったぎりぎりの事態に追い詰められている。

ある日、カトマンズで信者2人(男性 82 歳, 女性 62 歳)が病死したが、カトマンズには墓地はない。そこで深夜、ひそかにジープでヌワコットのトリスリ川沿いの人里離れた森まで運び、すばやく穴を掘り、2人を埋め、急ぎカトマンズに戻った。地元民には、もちろん内緒。

このような方法での信者埋葬は、ヌワコット以外にもダディング、ラウタート、シンドバルチョーク、カブレなどあちこで行われており、時にはスルケットまでも運ぶこともあるという。「よくないに決まっているが、ではどうすればよいのか？他に方法はないのだ。」(BG. ガルトラジ全国キリスト教連盟[FNCN]議長)

2. ゴティケル墓地の棚上げ

カトマンズ盆地のキリスト教徒が、このような深刻な事態に追い込まれたのは、政府が約束を実行せず、墓地問題を棚上げにしているからだ。

従来、カトマンズ盆地のキリスト教徒(及びキラント諸民族)は、パシュパティ寺院のシュレスマンタク・バンカリの森への埋葬を黙認されていた。ところが、2006年革命の結果、国家世俗化が実現し、これによりヒンドゥー教側もかえってアイデンティティを明確化させていき、2011年1月、「パシュパテ地区開発トラスト(PADT)」が寺院敷地内のバンカリの森への埋葬を拒否する決定を下した。

この埋葬拒否により深刻な事態に陥ったキリスト教会は、2011年4月、ハnstを決行、政府に「墓地問題検討委員会」を設置させた。そして、そこでの交渉の結果、政府はラリトプル郡ゴティケルに2000ロパニのキリスト教墓地をつくることを約束した。ビノド・パハディ委員長によれば、すでにゴティケルの住民やラリトプルの郡庁と郡森林局の同意も得てあるという。

ところが、この約束は実行されないまま、委員会が任期切れとなってしまった。ゴティケル墓地は棚上げ。抗議すると、政府は造るというが、口約束だけ。「もし今度も空手形なら、強力な抗議運動を全国に呼びかける」(ガルトラジ FNCN 議長)

3. 国家世俗化とキリスト教

2006年革命により、ネパールはヒンドゥー教国家から世俗国家に転換した。ヒンドゥー教にとっては、これは大敗北であり、他宗教、とくにキリスト教への敵愾心を強めている。パシュパティの森の墓地問題は、その最も極端な実例である。

キリスト教徒は、全人口の1.4%とされている。少数派だが、バックに欧米のキリスト教会が控えており、世俗化の追い風に乗り勢力を急拡大させている。たとえば、この記事を書いたカトマンズポストのアンキド・アディカリ編集委員は、クリスチャンか否か不明だが、出身校は、聖ザビエル校(カトマンズ)である。

聖ザビエル校は、イエズス会系の学校であり、ネパールには5校ある。カトマンズ校は1988年設立で、いまや大学院までもつ超名門エリート学校。アディカリ氏は、この学校で英文学を修め、ジャーナリストとなったようである。

彼のこのような経歴が、おそらく彼をしてキリスト教会への理解を深めさせ、墓地問題を追わせているのだろう。彼の記事そのものは、問題に即して書かれており公平と見えるが、ヒンドゥー教徒の側から見ると果たしてどうなるか？ここが難しいところだ。



■ 聖ザビエル校(カトマンズ)

キリスト教会側の攻勢は、教育以外でも様々な形で展開されている。たとえば、これはタルー民族への働きかけ。詳細はわからないが、「はじめに言葉があった」と信じるキリスト教のこと、タルー以外にも様々な少数民族の言葉で布教を進めている。



■ [Good News THARU](#)

4. 宗教対立激化のおそれ

国家世俗化は、一般に、宗教対立の緩和が目的だが、ネパールでは、少なくとも今のところ、それは宗教アイデンティティの強化→宗教対立の激化という逆の結果をもたらしている。

墓地を取り上げ、死者を埋葬させない！ これはセンセーショナルな切羽詰まった問題であり、外部からの干渉も招きやすい。対処を誤ると、ネパールは取り返しのつかない深刻な宗教紛争に陥ってしまうだろう。

谷川昌幸(C)

2013/08/31 08:48

カテゴリ: [宗教](#), [人権](#)

タグ: [キリスト教](#), [バシュパティナート](#), [ヒンドゥー教](#), [埋葬](#), [墓地](#), [死](#), [世俗国家](#)

インドはネパール 76 番目の郡:Nepali Humor

仏陀はネパールに生まれ、エベレストはネパールにある、したがって、インドは**ネパールの 76 番目の郡**だ！

ネパールお得意のユーモア。自虐ネタであり、仏教の政治的利用(これはかなりマジメ)でもあるが、内弁慶の日本ナショナリストよりはマシだ。くやしかったら、**アメリカは日本の 48 番目の県**だと、アメリカに向かって叫んでみよ。



■[India - 76th District of Nepal](#)

谷川昌幸(C)

2013/08/30 10:00

カテゴリー: [インド](#), [外交](#)

タグ: [ナショナリズム](#), [政教分離](#), [世俗国家](#), [仏教](#)

トニー・ハーゲンのネパール記録映像

トニー・ハーゲン(1917-2003)のネパール調査記録フィルムがユーチューブで公開されている。まさに古き良きネパール。半面の真理であり、懐古趣味にはちがいないが、「進歩」とは何か、「幸福」とは何か、改めて考えさせられる。

■[Uhile ko Nepal - Nepal of the Past - A Documentary by Toni Hagen](#)

ネットでは、これ以外にも、ネパールの自然や社会に関する様々な映像が続々と公開されている。著作権も何もあつたものではない。文章も映像も万人のもの。本来、ネットとは、このようなものであろう。ネット公開情報の急増により、ネパールは、誰にとっても、もはや神秘の国ではなくなった。



■化膿を切開治療／ウキをつけ荷渡し

谷川昌幸(C)

2013/08/24 14:07

カテゴリ: [情報 IT](#), [文化](#), [歴史](#)

タグ: [Toni Hagen](#)

対ネ最大投資国, 中国

新華社(8月21日)によれば, 対ネパール投資において, 中国が最大投資国となった。

ネパール政府統計 2012-13 によれば, 諸外国の対ネ直接投資は193.9億ルピーで, 中国がその30.9%を占め, 初めてインドを抜き, 最大の対ネ投資国となった。

▼2011-12年度 インド:38.8億ルピー 中国:10億ルピー

▼2012-13年度 中国:59.9億ルピー インド:25億ルピー

これが大きな意味を持つことは明白。中国にとって, ネパールは南にインドを控えており, 経済的にも政治的にも重要性は増すばかり。インドとの軋轢はあろうが, この流れはもはや止められない。

この中国投資でいま注目されているのが, ポカラ国際空港の建設。中国輸出入銀行からの長期低利融資1億4500万ドルを受け, 中国の空港(成都双流国際空港など)をモデルに, 中国 CAMC(中工国際工程股份有限公司)が施工する。

このポカラ国際空港は, 1989年頃から日本の JICA が手がけたが, 結局, 中国丸抱えで建設されることになった。[ルンビニ開発](#)も, もとは日本が手がけていたが, こちらも, バイラワ国際空港建設を手始めに, 結局, 中国勢が中心となりそうだ。

まさに破竹の中国経済進出。昨日の新華社ニュースによれば、中国は公館もネパール国内に増設するという。日本は蹴散らされても実害は大してないが、インドにとっては、心中穏やかではあるまい。



■ポカラ国際空港フェイスブック

谷川昌幸(C)

2013/08/23 09:12

カテゴリー: [インド](#), [経済](#), [旅行](#), [中国](#)

タグ: [ポカラ](#), [ルンビニ開発](#), [空港](#)

講演会:ネパールを知ろう!

ネパール関係の講演会がありますので、ご紹介します。

講演会:ネパールを知ろう!

「ヨード欠乏症の根絶を目指して」熱田親憲(ネパール・ヨードを支える会)
 「ネパールの観光の魅力」上田一彦/シュレスター・ニローズ(国際交流団体未来)
 「ネパールで体験したこと」榎井 緑(大阪大学未来戦略機構)
 (日時)9月10日午後1時30分~4時
 (場所)宝塚市男女共同参画センター(ソリオ2)交流室
 (申込先) [国際交流団体未来](#)

「ネパールを知ろう！」

国際理解講演会 入場無料 先着予約50名様

●日時:2013年9月10日(火) 午後1時30分~午後4時

●場所:宝塚市男女共同参画センター(ソリオ2) 交流室

●基調講演

<p>「ヨード欠乏症の根絶を目指して」 「ネパールの観光の魅力」</p> <p>NPO 法人ネパール・ヨードを支える会 理事 熱田 親憲</p>	<p>NPO 法人国際交流団体未来 理事 上田 一彦 / シュレスター・ニローズ</p>
--	--




●特別講演 「ネパールで体験したこと」

大阪大学未来戦略機構 榎井 緑 准教授

プロフィール
 大阪大学特任准教授、公益財団法人および民間交流協会理事、自治体国際協力アドバイザー、大阪府外国人労働者支援委員、ネパールで活動してインドネシア東部の教育支援団体を設立、中学校教員として国際教育に取り組んだ後、神奈川や大阪で在日外国人教員の調査や相談に携わる。現在は大阪大学未来戦略機構第五部門で未来共創イノベーション修士課程プログラムに携わっている。

主催: NPO 法人国際交流団体未来・NPO 法人ネパール・ヨードを支える会
 後援: 認定 NPO 法人宝塚 NPO センター
 申込先: 国際交流団体未来事務局 〒665-0805 宝塚市豊丘3-13-6
 TEL 080-1508-1919 FAX 072-758-1475
 E-mail info@mi-raloro

谷川昌幸(C)

2013/08/22 10:31

カテゴリー: [教育](#), [旅行](#)

タグ: [観光](#), [保健](#)

宝塚のネパール料理店:リバジャ

「リバジャ(रिवाज)」は、いかにもネパールらしい料理店だ。

「[プジャ](#)」が、[タカラジェンヌ](#)も集うとウワサされるおしゃれな店であるのに対し、リバジャは庶民向けの店だ。駅から離れた運動公園、河川敷公園の近くにある。レストランとしての立地は、決してよくない。近隣の住民や公園に遊びに来る人びとを顧客にしているのだろう。

昨日、夕食をとっていたら、運動公園での練習帰りらしい女子高校生が数名やってきて、「やっぱ、ネパールの方がうまいネ」などといいながら、わいわい、がやがや楽しそうにカレーを食べていた。プジャのように小綺麗で上品ではないが、いかにもネパール的。頑張っ



谷川昌幸(C)

2013/08/21 09:11

カテゴリー: [文化](#), [旅行](#)

タグ: [ネパール料理](#), [宝塚](#)

京都の米軍基地(16):レイセオン下請以下の参与会意見

京都府の「[TPY-2 レーダーの電磁波の影響に関する参与会の意見](#)」を見て唖然とするのは、基本中の基本のはずのレーダー性能について、製造元のレイセオン社ホームページを根拠としていることだ。

「**米国 Raytheon 社のホームページによると、TPY-2 レーダーは……**」

ネットは北朝鮮でも中国でも、いやド素人の私でも見ることができ、こんなところに最新兵器の重要情報が書かれているはずがない。参与会意見は、そんないいかげんなネット情報を根拠としているのだ。

しかも、確たる根拠がないものだから、科学的良心に従い——将来の責任追及を免れるため——重要部分の記述は、ほとんどが**推測**となっている。

「ビーム走査範囲は上下左右±約 45°程度と推測される。」

「合計 90°の範囲をカバーしていくものと思われる。」

「1000Km ぐらいの距離が感知できるのではないかと考えられる。」

「TPY-2 レーダーの出力はおそらく数百 kw と推測でき……」

私たちは、1万円程度の電子レンジを買うときでも、もう少しましな性能チェックをする。車ともなれば、エンジン出力、燃費、安全装置、インテリアなどを入念に調べ、比較検討する。ところが、参与会は、はるかに高価で危険な X バンドレーダーについて、兵器メーカーの公開ネット情報による推測で安全評価をしている。およそ科学的とは言いがたい。

この程度のことであれば、下請以下の参与会ではなく、直接、レイセオン社ホームページを見た方が、はるかに正確だし、何よりも面白い。まるで劇画未来戦争のようだ。

▼[レイセオン社ホームページ](#)

▼[ミサイル防衛システム\(動画 3 分 11 秒\)](#)

▼[TPY-2 レーダー\(動画 1 分 16 秒\)](#)



■レイセオンのハイテク戦争ビジネス(Raytheon)

レイセオン社は世界最大のミサイルメーカー。2012 年度の売上 240 億ドル、従業員 6 万 8 千。

「レイセオンは、すでに 8 台の AN/TPY-2 を販売し、現在、アメリカと他の同盟 2 カ国の顧客のため 3 台を製造中である。」

「現在、前線配備型 AN/TPY-2 は日本、イスラエル、トルコに配備され、アメリカと友好同盟国を防衛している……」

Xバンドレーダーと連動する迎撃ミサイルなど、実際には当たりはしないが、軍需産業にとっては、そんなことはどうでもよい。一台いくらか知らないが、関連サービスも含めると天文学的売上となり、会社を潤す。

過疎地・丹後は、捨て石となり、最新兵器を受け入れることにより、アメリカと日本の政官学軍複合体＝「死の商人」の繁栄に少なからず寄与することになる。

BALLISTIC MISSILE DEFENSE

THERE ARE **6,300+** BALLISTIC MISSILES OUTSIDE OF U.S., NATO, RUSSIAN AND CHINESE CONTROL*

THE AN/TPY-2 RADAR

↑ THREAT INCREASING

- 7,950 MISSILES BY 2020*
- GREATER ACCURACY & RANGE*
- COVERT MEASURES*
- IMPROVED ENEMY TACTICS*

DEFENDS AGAINST THE GROWING BALLISTIC MISSILE THREAT

Search & Track - Acquire - Track - Threat Detection - Threat Identification - Threat Classification - Threat Prioritization - Threat Warning - Threat Assessment - Threat Response

THE AN/TPY-2 MEETS THIS THREAT

KEY ELEMENT IN DEFENSE OF U.S., ALLIED COUNTRIES AND ALLIES

RAPIDLY RELOCATABLE

EFFECTIVE AGAINST ALL CLASSES OF BALLISTIC MISSILES

ACQUIRES TARGETS IN INITIAL, MID COURSE AND TERMINAL PHASES

DEFEATS COUNTERMEASURES

Raytheon
Customer Success is Our Mission



■ミサイル防衛システム／TPY-2 レーダー(Raytheon)

Future

International Cooperation

Continued from page 2:

Interoperable, interoperable, accomplished through a training effort with the National Advanced Air Missile System (NAAMS) program.

- The National Advanced Air Missile System (NAAMS) program, developed by Raytheon and our Norwegian partner, Kongsberg Defense & Aerospace, provides a state-of-the-art medium-range air defense system. Its features include portability and flexibility, demonstrated by a recent successful flight test with the British Sea Sparrow Missile. This adds another dimension to the NAAMS and Hawk 300 family of ground-based air defense systems.

Raytheon provides the state-of-the-art defense and security systems for U.S. and international coalition partners. As a leader in Raytheon's technology and solutions for U.S. government, central, state, and local, we are committed to providing the best of our technology and expertise to our customers. In addition, Raytheon will continue to provide the best of our technology and expertise to our customers.

Raytheon WPA Technology, an industry leader in real-time threat detection for intelligence gathering, provides an overview of the Multi-Mission Monitoring System (MMS). This system is an end-to-end capability for monitoring, tracking, storing and searching a wide variety of open source media across a range of languages. MMS provides users with a multi-dimensional understanding of news, events and perceptions around the world.

The systems and technologies described in these articles are just a sampling of the advanced technology and knowledge in defense systems available to the international community.

Mark Heston

■日米兵器開発協力:レイセオン+三菱重工(Raytheon)

谷川昌幸(C)

2013/08/19 10:36

カテゴリー: [軍事](#), [平和](#)

タグ: [ミサイル防衛](#), [レイセオン](#), [米軍基地](#), [経ヶ岬](#), [軍需産業](#), [TPY-2](#), [Xバンドレーダー](#), [死の商人](#), [丹後](#), [京丹後](#)

京都の米軍基地(15): 受け入れ 10 条件

1. 条件付き受け入れ表明

京丹後市長は 8 月 1 日、米軍 X バンドレーダーの空自経ヶ岬分屯基地への配備計画につき京都府知事と協議し、「(受け入れ 10)条件に政府がしっかり対応するなら、受け入れに必要な協力ができる」と約束した(京都新聞 8 月 1 日)。

市長は [8 月 6 日の市議会全員協議会](#)においても、「受け入れを前提に条件を確認している」と述べ、「確認できなければ協力表明はできない」と明言した。さらに、「住民の命を守るのが行政であり、市民の安全、安心に影響があれば体を張って反対する」と勇ましい(毎日 8 月 7 日)。

府知事と市議会への説明後、8 月 7 日に開催された地元住民説明会(宇川小学校)では、本音もチラリ。「安全安心が確保されるなら、必要な協力をするのが道理」(京都 8 月 8 日)。「日本の国民の一員として国防を考えねばならない」(毎日 8 月 8 日)。「日米安保条約が大切だと考えている」(同上)。



■豪華な京丹後市庁舎

2. 受け入れ 10 条件

京丹後市長が京都府知事に示した X バンドレーダー受け入れのための 10 条件は、以下の通り。

- 【1】(事件・事故、被害等対策)事件・事故防止努力と、被害への適切な措置
- 【2】(上記に関する検証)電波強度の実測と無害の検証
- 【3】(同上)騒音レベルの調査と、騒音対策
- 【4】(同上)排水の環境影響調査と、必要な措置
- 【5】(生活・産業影響への対策)民生安定、生活環境、産業振興、環境整備、住民福祉等への支援
- 【6】(同上)水供給への万全の措置
- 【7】(同上)米軍関係者の居住地選定の適切な手続
- 【8】(同上)道路の拡幅と新設
- 【9】(日米地位協定の見直し検討の要請)米軍関係者による事件・事故等が発生した際の刑事裁判手続きに関し、日米地位協定における米軍人・軍属に対する裁判権の行使に関する運用について住民不安の解消のため絶えざる改善に努めること。
- 【10】(その他全般)これまでの国側回答の誠実な履行

3. 「お願い」が条件

この受け入れ 10 条件の詳細は下記資料をご覧くださいこととして、その本質を一言でいえば、これらは「お願い(要請)」にすぎず、住民の安全・安心を保証するものではないということ。

道路・水道など一時的な補助事業の部分を除けば、肝心の安全・安心については、結局、「日米地位協定の**見直し検討の要請**」ということに尽きる。すなわち、「絶えざる改善に努めること」という、単なるお願いにすぎない。

この点に関し、一部メディアが、米軍基地受け入れは「日米地位協定の見直しが条件」と報道していた。初めこれを見てビックリ、さすが京の都には骨がある、と感動した。そして、京丹後市長も、この条件が確認されなければ、「協力は表明できない」、「体を張って反対する」と断言されていた。市長は、某方面からのテロなど恐れることなく、文字通り「体を張って反対する」決心をされたにちがいない。そう考え、市長の、源頼光に勝るとも劣らない勇気に心から惜しみなく拍手をしたものだ。

ところが、これまでの経過を考えると、これはどうも不自然だ。そこで、もう一度、各紙報道をよく見ると、日米地位協定の「見直し」ではなく、正確には「見直し検討の要請」であった。つまり、「見直し」でないことはおろか、「検討」ですらなく、単なる「**検討の要請**」にしかすぎない。

啞然とし、深く落胆。こんなものは、屁の突っ張りにもならない。

4. 責任無能力の政府と米軍基地を守る警察

悲しいことに、日本政府の安全・安心の約束は、沖縄米軍基地や福島原発により、まったく信用ならないことが明らかとなった。とくに米軍基地については、米軍が軍事的必要により自由に使用するのであって、日本政府は、お願いはできても、事実上、規制はできない。オスプレイは、日本全国、たとえ高浜原発の上だろうが、京丹後市議会上空であろうが、自由に飛ぶ。いくら日本政府がお願い(要請)しても、聞きおくにすぎない。

さらに、京丹後市長は、安全・安心のための警官配備を要請し、府知事も丹後への警官増員を検討すると約束した。しかし、警察の警戒対象は主として**住民**であり、米兵ではないことを忘れてはならない。

基地内は治外法権、基地外でも「公務」免責。日本政府は手出しできない。警察は主として米軍基地とその要員を守るために増員される、という「**不都合な真実**」を見落としてはならない。

5. 平和の放棄

米軍基地は、京丹後市長・京都府知事はおろか、日本政府にもコントロールはできない。ウソだと疑うなら、沖縄米軍基地の歴史を見よ。

はした金の補助事業に目がくらみ、そんな危険な米軍基地を受け入れたら、もはや丹後に平和はない。

[参考資料1]

米軍 TPY-2 レーダーの配備計画の受入に際する確認(条件)について(メモ)

以下、政府として責任ある対応の確認を求める。

記

(事件・事故、被害等対策)

○ 米軍TPY-2レーダーの配備に伴い、あらゆる事件・事故の防止に総力をあげて取り組むとともに、仮にも事件・事故が発生した場合には、責任をもって適切な措置を講ずること。

特に、万一にも決してあってはならない健康への影響又は環境被害(農畜産物及び漁業又は鳥類の飛来等を含む)等が発生した場合又はそのおそれが合理的に出てきた場合には、安全性が回復・確認されるまでの間の停波を含め責任をもって適切かつ確実な措置を講ずること。

(上記に関連する検証)

○ 海上における漁業従事者の不安に適切に対処するため、レーダー設置の前後に、レーダー配備地の前面周辺海域における電波強度を実測比較し、有意な電波影響のないことを検証すること。

○ 周辺地域への防音に適切に対処するため、レーダーの設置の前後に、周辺地域の騒音レベルの比較調査を行い、有意な影響のないよう万全な騒音対策を講ずること。

○ 海への排水(一日あたり50トン程度と見込)の環境への影響に対する不安に適切に対処するため、レーダー設置の前後で環境への影響調査を行い、必要な措置と検証を行うこと。

(生活・産業影響への対策)

○ 同レーダーの配備に伴い、農業、漁業、観光等地域の生業・産業はじめ日常の地域生活の維持に負の影響を直接・間接問わず来たすことのないよう、民生安定、生活環境(公用ヘリコプター運用、民生電波等への影響含む)、産業振興環境の整備、住民福祉等に対して万全な予防及び支援措置を講ずること。

○ 同レーダー配備に伴い大きく増加する水の使用に適切に対処するため、地域住民の生活維持に絶対に欠かせない水の供給環境について、地元区、地元自治体の意向を踏まえ万全な措置を講ずること。

○ 米軍関係者の施設・区域外における居住場所の選定にあたっては、地元区、地元自治体の意向を踏まえ、適切・丁寧な手続きを確保すること。

○ 予想される交通量の増加や、決してあってはならないが万一の事態への懸念に備えた迅速な住民避難・施設保全等のため、各種道路の拡幅・新設等必要不可欠な交通環境・アクセスの整備に対し真摯かつ万全に対応すること。

(日米地位協定の見直し検討の要請)

○ 米軍関係者による事件・事故等が発生した際の刑事裁判手続きに関し、日米地位協定における米軍人・軍属に対する裁判権の行使に関する運用について住民不安の解消のため絶えざる改善に努めること。

(その他全般)

○ 上記のほか、本年2月の候補地申し入れ以降、累次にわたる質問書をはじめ議員全員協議会、住民説明会においていただいた国側回答の内容について、誠意と責任をもって履行されること。

[参考資料2]京丹後市議会議員全員協議会(8月6日)

2013/08/14 21:07

カテゴリー: [軍事](#), [平和](#)

タグ: [米軍基地](#), [経ヶ岬](#), [Xバンドレーダー](#), [日米地位協定](#), [日米安保](#), [丹後](#), [京丹後](#)

「風立ちぬ」: ごちゃまぜ中途半端

連日の酷暑に参り、涼みに映画館へ。宮崎駿監督「風立ちぬ」を観てきた。126 分の大作。

絵はきれいで、あれこれ考えさせられるところもある作品だが、一度見た限りでは、全体的に中途半端で、とくに三分の二位の部分はダレ気味で、間が持たない感じ。

ストーリーは、堀越二郎のゼロ戦設計に至る半生と堀辰夫『風立ちぬ』を合わせたもの。堀越のことは全く知らないし、『風立ちぬ』もほとんど忘れていたが、この合わせ技がうまくいっていない。

[企画書\(宣伝パンフレット\)](#)には、「この映画は実在した堀越二郎と同時代に生きた文学者堀辰雄をごちゃまぜにして、ひとりの主人公“二郎”に仕立てている」と書かれている。いくらなんでも「**ごちゃまぜ**」はひどいと思ったが、観た後では、たしかに「ごちゃまぜ」という印象を払拭しきれなかった。正直な企画宣伝部員だ。(それとも、これは監督自身の本音か?)



「ごちゃまぜ」感を禁じ得ないのは、「菜穂子」と「ゼロ戦設計」が二兎追いとなり、どちらつかずとなっているから。「純愛」なら菜穂子を追うべきだが、追い切れない。宣伝文に「愛と青春を描いた一大感動作!!」と謳うが、ちょっと違うのではないか?

この映画のメインテーマは、やはり「ゼロ戦設計」の方であろう。「純愛」をウリとするのなら、戦闘機であれ何であれ「美しい飛行機」でさえあればよい、といった「純粋さ」を追い詰めるべきだった。ところが、二兎追いの結果、「純粋さ」は維持しきれず、随所に戦争批判が織り込まれる。観客はなめられている。中途半端な、平板な戦争批判が、申し訳のサッカリンのように「純粋さ」にまぶされている。観客のためではなく、制作者自身のために。

そもそも堀越二郎といった実在の人物や「風立ちぬ」といった既成作品を下敷きにしたのが、まずかったのではないか？ フィクションに徹していたら、純粹に生きようとする人々が自他を傷つけ、あるいは悪に荷担せざるを得ない人生の不条理を、美しくも切なく、冷酷にして残酷に描けたのではないだろうか？

この映画では、「ピラミッドの無い世界より有る世界の方がよい」あるいは「(それにもかかわらず)生きねば」といったメッセージが、セリフや語りでくどくど説明されている。作品としての完成度が不十分と言わざるをえない。

[新聞記事:2013.8.21 追加]

▼[映画:賛否両論「風立ちぬ」「感動」×「違和感」キーワードは「ピラミッド」](#) (毎日新聞 2013年08月21日東京夕刊)

「私(記者)も見た。126分の上映時間が過ぎ、エンドマークが出る。沈黙。周囲の観客はささやきすら交わさず、おもむろに帰り支度を始める。そう、感想を言葉にしようにも、言葉にならないのだ。「宮崎監督は何を訴えたかったのだろう」。素朴な疑問がいつまでも消えない。」

この記者の疑問は「素朴」ではない。やはり、できが悪いのだ。記事によれば、東浩紀、中森明夫、藤原帰一、渡辺真由子、大高宏雄といった人たちも厳しい評価をしているという。

谷川昌幸(C)

2013/08/11 11:00

カテゴリ: [平和](#), [文化](#)

タグ: [ゼロ戦](#), [風立ちぬ](#), [宮崎駿](#), [映画](#)

焼身抗議死報道の自己規制

ボダナートの仏塔の側で8月6日、チベット僧カルマ・ゲトウン・ギャンツォさん(39歳)が焼身抗議死(焼身自殺)を遂げた。ボダナートで3人目。(生死不明を含め焼身抗議総数 126人)

カルマさんは、チベットで僧侶となったが、下半身麻痺となり、政府圧力により僧院追放、各地を巡礼し、ネパールを経てダラムサラに亡命していた(中原一博「ダラムサラ通信」8月9日参照)。

周知のように、ネパール政府は、「一つの中国」政策を支持し、ネパール国土を反中国活動に使用させないと繰り返し約束している。いまでは「一つの中国」を宣言してからでないと、中国側とのいかなる会合も始まらない有様だ。

ネパール政府は、こうした反中国活動取り締まり要求に応え、ボダナートなど、チベット系住民の多い地区に警官多数を配備し、さらに[ハイテク監視カメラ](#) 34台を設置した。

主たる監視対象はチベット系だろうが、カメラに人種差別なし。日本人でも挙動不審であれば、マークされる。当然、某国にも筒抜けだろう。ヒッピーのよき時代は今や昔。ポダナートで某国に監視され、アメリカンクラブ付近で某々国に監視され……。

自由チベット運動に対しては、こうしたハードな取り締まりに加え、最近ではソフトな規制も始めているようだ。各メディア(8-9日)の記事タイトルはこうなっている。

AP「チベット僧、中国に抗議し焼身自殺」

ekantipur「僧、焼身自殺」

nepalnews.com「チベット人、ポーダで焼身自殺」

Nepali Times「また焼身自殺」

Himalayan「チベット僧、自分に火をつけ死亡」

新華社(英文)「ネパールの身元不明焼身自殺者は身体障害者だった:地元住民」

APと新華社が両極にあり、他のネパール・メディアがその中間に位置する。ネパール・メディアは、記事内容も、ほとんどが警察発表通り(後日、多少補足修正された)。自己規制しているのだろう。

興味深いのが、新華社。記事はやたら詳しく、しかも一定の方向性をもっている。カルマさんは、焼身のため200ルピーでバターランプを買った(他メディアでは100-150ルピー)。動機については、マノジ警察DSPの説明——「政治的動機か否か、また自殺か焼身抗議か、これから調査したい」——をそのまま掲載している。タイトルで、身体障害を苦に自殺したと暗示し、それをこのマノジ警察SDP説明で補強しているのだ。

このところ中国の情報収集・発信能力の強化は、目を見張るばかりだ。ネパールでも、すでにネパールのメディア自身が「新華社によれば……」などと、中国情報源を利用し始めている。日本でも、中国メディアを介したネパール情報が急増し始めた。

さすが中国は大国、要所を押さえ、勢力拡大を図っている。かつて宗教は民衆のアヘンだったが、現代では情報こそが、いわば「民衆のアヘン」。情報を制するものが、世界を制する。(尖閣も竹島も、情報報道戦では、日本劣勢。内弁慶日本の悲哀を感じざるを得ない。)



■新華社日本語版(2013.5.27)。元首相のプラチャンダ、MK・ネパール、B・バタライが「中国夢」絶賛

谷川昌幸(C)

カテゴリー: [外交](#), [情報 IT](#), [中国](#)

タグ: [チベット](#), [焼身自殺](#), [報道](#), [新華社](#), [中国夢](#)

紹介:『長岡信治遺稿集』

長崎大学教育学部の地理学教授であった長岡さんの遺稿集が刊行された。A5 判 1000 頁の大著。

■遺稿集刊行会編『長岡信治遺稿集』長崎大学教育学部, i-xv, 1-979 頁, 2013 年 4 月

[収録論文]

・長岡信治「上高地の地形・地質」1988

・長岡ほか「クンブー・ヒマール, ゴジュンパ氷河周辺のもレーンとその編年」1990

・Nagaoka, The Glacial landforms in the Manang valley, north of the Great Himalayas, central Nepal, 1990

・(他 49 編)



■表紙

長岡さんは、長崎大学教育学部の同僚教員であった。私の赴任が 2000 年 4 月、長岡さんの 52 歳での急逝が 2011 年 7 月だから、11 年余ご一緒させていただいたことになる。

長岡さんは地理、私は政治学と専門は異なっていたが、信州やネパールのことについては、折に触れ教えていただいた。私の方は単なる趣味にすぎないが、学生時代から登山が好きで、信州にもよく行っていた。そして、それが高じて、1985 年にはアンナプルナ・トレッキングに行き、すっかりネパールに惚れ、とうとうネパールの憲法や政治まで研究する羽目になってしまった。だから、長崎大学教育学部に赴任し、はじめて研究室に行くと、廊下の衝立にマチャプチャ

しの大きな写真が貼ってあったのを見て驚き、また嬉しくなった。長岡さんのもので、これは最後までそのまま使われていた。マチャプチャレは、私が四苦八苦してダンプスまで登り、はじめて見たヒマラヤの山であった。

長岡さんには、山のことだけでなく、もちろんネパールの酒のことも教えてもらった。また、ネパールから政治学専攻の院生を受け入れたときも、数年間にわたって、あれこれ相談に乗っていただいた。留学生には、豪放磊落な長岡さんは話しやすかったのだろう。



■ダンプスから望むマチャプチャレ、アンナプルナ。この家の前を歩き、ガンドルンクへ向かった。長岡さんも、この道を登ったのだろうか？ 聞き忘れてしまった。

長岡さんの急逝には、いくつか原因があるだろうが、近くで見えて感じたのは、あまりにも多忙だったということ。それでも、私が赴任した2000年頃は、まだましだった。学生もある程度大人だった。ところが、数年もすると、予算と教職員の削減、学部改組、自己評価、教員免許講習などで時間がとられる一方、学生の気質が一変、「指示待ち生徒」のようになり、教育研究指導にも苦勞するようになってきた。

長岡さんは、研究に厳しく妥協を許さない。研究室をのぞくと、いつも数編の原稿を抱え、締め切りに追われていた。休暇はますます短くなったが、それでもマダガスカルなどに、日程をやり繰りし調査に出かけていた。学生指導でも、一見手抜きのように見えるが、実際にはトコトン厳しく面倒を見ていた。長岡ゼミは、私のゼミ以上に多彩な学生が集まり、時間的にも精神的にも指導は大変そうであった。長岡さんは、もともと話し好きで、研究室に行けば相手をしてくれるのだが、このあまりの多忙さに気が引け、たんだん自主規制するようになってしまった。

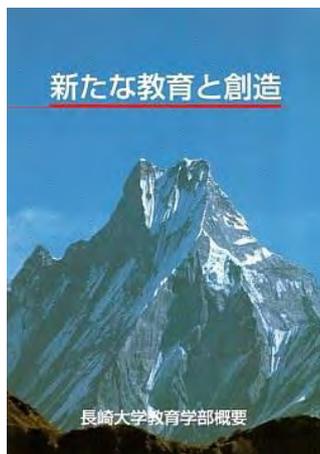
長岡さんの多忙に輪をかけたのは、豪快に見えて繊細、手抜きに見えて完璧主義の、その性格である。研究をあれほど大切にしていながら、教育指導や学内問題にも手抜きはしない。学内文書作成などでも、最初はかなり怪しい原稿だが、最後にはきちんと完璧な文書に仕上げたしまう。これでは、ストレスはたまるばかりで、時間はいくらあっても足りない。そのようななか、長岡さんの体調は悪化していった。あれこれやっているが、なかなか良くならないと、よくこぼしていた。亡くなる半年くらい前には、どの薬もよく効かないので、漢方薬にしてみようかと言われたので、それも一つの手だが、漢方薬の副作用も恐ろしいので、よく調べてからでないといけないのでは、といったことも話したことがある。

長岡さん急死の背景に、多忙による過勞があることは、明らかである。いまの制度では、教育研究や学校運営に誠実であろうとすればするほど多忙となり、過勞死に追いやられる。個々人というよりは、むしろ制度がおかしい。文科省あるいは大学は、教育と研究にとって本当に必要なことをよく見極め、厳選し、教育研究環境を改善すべきだ。長岡さんのような本物の教育研究者を過勞死に追い込まないために。

長岡さんの死後しばらくして、私自身の体調が激変した。前兆はあった。6月頃、長岡さんと廊下で出会ったとき、「どうした、いまにも死にそうだなあ」と声をかけられた。その時は、それほど悪化せず回復したが、長岡さんの死後、秋に

なると、様々な体調異変が始まった。睡眠は連日2時間ほど。耳鳴りがはじまり、時々聞こえなくなる。便秘がつづき、尿が極端に少なくなり、食欲もない。長岡さんの急逝の後なので、これは危ないと感じたが、あと半年で定年退職なので、用心しつつ何とか乗り切ることにした。

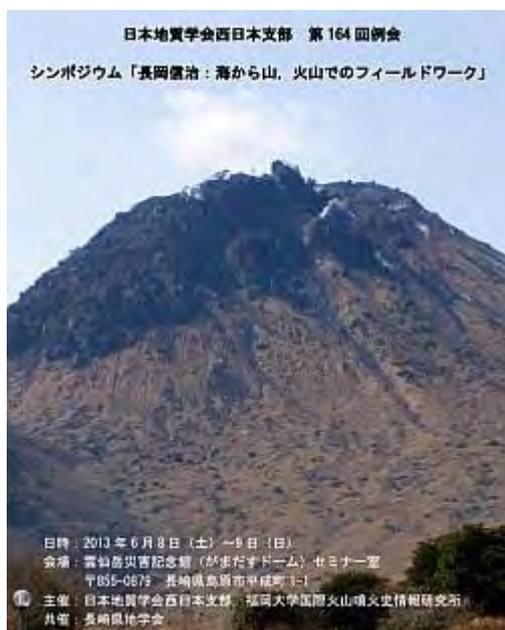
ふらふら、よれよれだったが、何とか3月まで生き延び、やっと停年を迎えた。正直、ホッとした。長岡さんに生かされたのでは、とひそかに思い感謝している。



■教育学部案内。表紙のマチャプチャレは長岡さん提供であろう。これも聞き忘れてしまった。

【参照】

▼[シンポジウム「長岡信治：海から山、火山でのフィールドワーク」2013年6月](#)



▼[世界の山やま アンナプルナ\(長岡信治\)](#)

▼[長岡信治「マダガスカルにおける象鳥\(エビオルニス\)の絶滅と完新世環境変動史」\(平成19年\)](#)

▼[雲仙岳と岳の棚田の地形・地質\(長岡信治\)](#)

2013/08/08 20:21

カテゴリー: [ネパール](#), [教育](#), [本](#)

タグ: [アンナプルナ](#), [エベレスト](#), [ヒマラヤ](#), [マチャプチャレ](#), [長岡信治](#), [長崎大学教育学部](#), [氷河](#), [上高地](#)

紹介:『ナラク ゴビンダ・マイナリ獄中日記』(2)

4. 獄中日記:日常化した非日常の記録

(1)日常化した獄中生活の記録

ゴビンダ・マイナリ氏の獄中日記『ナラク』は、この事件と裁判の異常性・特異性とは対照的に、記述それ自体はごく日常的であり、「平板」とすらいってもよい文章である。

むろん拘置所や刑務所は特異な世界だが、そこでの生活それ自体はあまり変化がなく、それをそのまま描いているという意味では『ナラク』は日常生活の備忘録的な記録に他ならない。警察・検察や裁判所への怒りや批判、刑務所生活への不満などは随所に述べられているが、一步踏み込んだ状況の分析や省察は、ほとんど見られない。

ゴビンダ・ブラサド・マイナリ

1966年、ネパールの東部にあるイラムの農家に生まれる。

1994年2月末に来日。インドレストランなどで働く。

1997年3月、東京都渋谷区円山町で発生した殺人事件（世に言うところの「東電OL殺人事件」）で誤って逮捕され、一審無罪にもかかわらず控訴審で逆転有罪、無期懲役となる。

2003年12月から横浜刑務所で服役。

2005年3月、獄中から再審を請求。

2012年6月7日、これが認められて裁判のやり直しが行われ、同年11月7日、東京高裁で控訴棄却判決を受け、無罪が確定した。

現在、ネパールの首都カトマンズにて、妻と二人の娘、実母の5人で暮らしている。



■表紙カバー裏面

(2)読者を想定した日記

この『ナラク』も日記だが、一般に日記には、もっぱら自分自身のために書く場合と、そうではなく、後日何らかのかたちで他人に見せることを想定して書く場合がある。では、『ナラク』はいずれであろうか？

大学ノート18冊の原文から取捨選択・編集されているので断定はできないが、全体を通して見る限り、他人に読まれたくないはずの自慰の記述(150頁)などもあるにはあるが、そうした部分はごくわずかであり、やはり誰かに読まれること、つまり読者を想定し、読者に何かを訴えることを意識して書かれた日記という印象を受ける。

しかし、もしそうだとするなら、『ナラク』はなぜこのような「平板」とも感じられるような記述となっているのだろうか？読者の関心を喚起し共感を得ようとする特段の工夫や努力は、少なくとも文章からは、あまり見て取れない。なぜなのか？

(3)ネパールの記述スタイル

それは、マイナリ氏に読者に訴え共感を得たいという意識がなかったからではなく、おそらく、ネパール特有の記述スタイルによるところが大きいのではないかと思われる。マイナリ氏は、冒頭で、こう述べている。

「今日から、日々の獄中生活をこのノートに書くことにする。私は読み書きが特に得意という訳でもなく、ましてや詩人や作家でもない。しかし、自分の日常の言葉で、日々の出来事、経験などがあるがままに書いてみたいと思う。」(20頁)

自分は詩人や作家ではないとっているが、この文章を見ただけでも、マイナリ氏が相当の筆力を持っていることは明らかである。「自分の日常の言葉で、日々の出来事、経験などがあるがままに書」くといったことは、誰にでもそう簡単に出来ることではない。

マイナリ氏は、東部ネパールの豊かなブラーマン(バラモン)家庭生まれであり、ネパールで学校教育(高校まで?)を受けているし、もともと進取の気性に富み、読書も好きであったという(Govinda Mainali's 15 Years of Isolation in Book Now, *ekantipur*, May 23, 2013)。彼は、学校教育や読書を通して、ネパールの学習方法や記述スタイルを体得していたのである。

ネパールの教育の特徴は、丸暗記である。自分であれこれ考え、思い悩むことなく、与えられた課題やお手本を丸暗記し、問われたら、覚えたことをそのまま答える。これは、ネパール社会の精神的基盤であるヒンドゥー教や仏教の教義学習方法と同じである(マイナリ氏はヒンドゥー教ブラーマン)。丸暗記は、ネパール文化の基調をなしているといつてよいであろう。

丸暗記は、出来事や経験をあるがままに(型どおり)観察し、あるがままに記述する、という観察・記述スタイルを育成する。ネパールの児童・生徒の作文や詩がそうだし、新聞・雑誌もそうだ。いや、そればかりか、おびただしい数の学術出版物も、たいていこの意味での型どおりの「対象に即した記述」となっている。

このネパール式記述は、個々人の**主体的問題意識**や**創造性**を重視する教育を受けた日本人には、退屈で面白くない、と感じられる。どのような出来事や経験であれ、私たちは、自分独自の主体的問題意識(と信じているもの)から分析し、意味づけ、理解しようとする。味も素っ気もないただの素材に、きらびやかな解釈の厚化粧を施し、これによって理解できたと安心し、またそれを世間に示し、注目を集め、評価を得ようとする。私たちは、**自意識過剰の近代病**にとりつかれているのだ。

しかし、実際には、どのような対象であれ、紋切り型から一步踏み込み、多少とも独創的な理解に達するのは、並大抵のことではない。それには相当の困難がともなう。そこで、たいていの人びとは、平凡な紋切り型の繰り返しにも、そ

れを突破するための努力にも耐えきれず、すぐ挫折してしまう。そして、その結果、出来事や経験の観察そのものへの意欲を失い、それらの記述を放棄してしまうのである。

ところが、丸暗記型は、そうはならない。いったん課題が与えられたら、対象を観察し、それをあるがままに記述して飽きることがない。マイナリ氏が行ったのも、まさにそれであろう。彼は、逮捕・投獄の不当を訴えることを課題と定め、その一環として獄中での「日々の出来事」や「経験」を「あるがままに」ノートに書き留めていったのである。たとえば――

「横浜刑務所に行くのは全部で5人、うち4人は日本人で、全員が手錠をされ腰縄に繋がれてマイクロバスで出発した。

東京拘置所を出ると高速道路に上り、東側から千葉県方向の京葉道路を通り、お台場にあるフジテレビの高層ビルやレインボーブリッジを通過。12時ちょうどに横浜刑務所に着いた。

12月28日から1月4日まで8日間は正月休みとなる。この休みを東京拘置所で過ごしたあとで、刑務所移送があるだろうと思っていたのだが、その前になってしまった。

刑務所に着くと、刑務官がまず写真を撮り、荷物を検査して部屋に持ち込む物を仕分けた。昼の12時にパンとリンゴジュース(250ml)、豚肉入りのカレー、揚げ魚などの昼食があった。午後2時に、入浴のため別の建屋に連れて行かれた。。

風呂につかり、ひげを剃った。全ての荷物を検査し、1号棟の1階105号房に入れられた。そこは雑居房で、ほかに日本人が6人いた。7年も独居房で暮らしてきたので、突然たくさんの人と一緒にになり、また部屋にテレビがあるのを見て嬉しくなった。

部屋の外に、民家やマンション、道路、空には飛行機、何でも見えるのも嬉しかった。

ここの先輩受刑者は、作業を終えたあと舎房に帰る前に、強制的に全裸にされ、両手両足を高く上げ、性器も見せて刑務官の検査を受ける。初めて刑務所に着いた日、全裸の受刑者たちの踊るようなしぐさを見て衝撃を受け、恐ろしくなった。」(40-41頁)

「トイレに行くときは、まず左手を上げ、駆け足で刑務官の前へ進み、頭を下げて名前と番号を告げる。小便か大便かを言うと、トイレトペーパーをもらえる。プラグを渡され、それを持って真つすぐ列に並び、左、右、左、右と足を運ぶにつれて腕を振ってトイレに進む。プラグをスイッチに差し込むと、緑のランプがドアの上に点灯する。終わると、来た道をそのまま戻る。

朝食は123号房でとる。ご飯と味噌汁。昼食は12時、第10工場でとらなければならない。今日の昼食は、手の平ほどのスパイス入り豚肉、ご飯、ヌードル、トマトと肉のサラダ、野菜スープ。うまいはずなのだが、食欲がなく、味もしなかった。夕食は5時に123号房で食べた。ご飯、茄子とミックスベジタブルのスープ煮。」(45頁)

ここには、獄中のことが「あるがままに」こまごまと書き連ねてある。そして、この記述スタイルは、内面的なことについても同じだ。たとえば、父の他界を告げられたときの日記――

「思い返すと、私の人生は苦しみばかりで、涙に明け暮れる40年間だった。子供時代も楽ではなかったが、結婚して2年も経たないうちに妻や子供と別れ、日本に来てからの3年間も、働きづめだった。そして日本の刑事司法制度の、悪鬼のような仕打ちによって、偽りの犯人とされ、過酷な監獄暮らしが10年になる。

実は、何か悪いことが起こる予感がしていた。父と言い争っている夢を見たのだ。ここを出て郷里に戻ったら、プラーナを行って功德を積み、父の想いを成就させなければならない。

夜、上級の刑務官が沈んでいる私の様子を見に来た。明日から5日間の連休なので、喪に服すには都合がいい。肉食を絶ち、わずかな米だけを食べ、『バガヴァッド・ギーター』を読誦することで父の靈魂を鎮め、清浄を保とう。刑務官には、そのことをお願いした。」(99頁)

獄中生活は規則づくめで変化に乏しい。たいていの人には、昨日の如く今日もまたあるような獄中生活の「日々の出来事」や「経験」を、毎日記述し続けるだけの根気と忍耐力はあるまい。そんなことを書いて何の意味があるのかと、日本人の多くは、書く前に書くことそれ自体を放棄してしまうであろう。

ところが、丸暗記式教育により課題と対象に即した記述という精神態度を体得していると思われるマイナリ氏は、獄中生活の日常をこまごまと記述して飽きることがない。そのかわり、踏み込んだ分析や意味づけは、ほとんど見られない。こうした記述は、むしろ、主体的問題意識を重視する習性の日本人読者にとっては、あまり面白くないであろう。買ってはみたものの、数ページ読んで、もう十分、わかった、わかったといって放り出すのが関の山だ。

しかし、これこそが本書の持ち味である。非日常が日常となったとき、日本人の多くは、変わることもない日常を描く退屈さに耐えられない。ところが、ネパール文化をバックとするマイナリ氏には、日常となった獄中の「日々の出来事」や「経験」を「あるがままに」書き続けることができたのである。

日記は大学ノート18冊にも及ぶというから、本書に訳出されたのは、その一部にすぎない。十数年の長きにわたって、日常と化した獄中生活を倦むことなく記述し続けてきたマイナリ氏の忍耐と、それを育成したネパール式教育に敬意を表したい。



■ *Paribandaka 15 Barsha*, Pairavi Book, 2013

5. 事件の異常性と『ナラク』の日常性

『ナラク』は、それだけ読めば、獄中の日常的出来事の繰り返しの多い記述にすぎず、あまり面白いとは言えない。その平板さは、この事件や裁判について書かれた日本の多くのドキュメンタリーや記事の面白さ——有り余るほどの主体的問題意識、解釈の独創性、意味付与の豊穡さ——の対極にあるといってもよいだろう。

しかし、『ナラク』の平板さは、マイナリ氏を非日常の日常へと陥れた事件や裁判の特異性あるいは異常性と対比されるとき、別の意味を持つものとして立ち現れてくる。

マイナリ氏に『ナラク』を書かせたのは、不正裁判(unjust-justice)への怒りであるが、裁判を不正に追い込んだのは、**私たち自身**である。外国人(日本人以外の非西洋人)蔑視と外国人労働者差別、人権無視報道とそれを喜び煽る多くの読者、その「世論」を背に強引な取り調べをする警察・検察と違憲裁判を続ける裁判所……。

われわれは、多かれ少なかれ**マイナリ氏冤罪の共犯者**であるとすれば、その結果の記録である『ナラク』を読む義務が、われわれにはある。おいしそうな解釈の果肉だけ食べ、**真実の堅い事実**には見向きもしないのであれば、食い逃げといわれても致し方あるまい。



■本書表紙

→ [紹介:『ナラク ゴビンダ・マイナリ獄中日記』\(1\)](#)

[参照]

[ゴビンダ冤罪批判、カトマンズポスト社説](#)

[ゴビンダさんの冤罪と日本社会の責任](#)

[ゴビンダ・マイナリ氏の再審・無罪判決を](#)

[獄中のゴビンダ氏と「支える会」](#)

[紹介『東電 OL 事件:DNA が暴いた闇』](#)

[東電 OL 殺人事件, 日弁連会長声明\(転載\)](#)

[東電 OL 殺人事件, 再審決定](#)

[Justice for Govinda Mainali jailed in Japan](#)

谷川昌幸(C)

2013/08/07 15:05

カテゴリ: [司法](#), [教育](#), [本](#), [人権](#)

タグ: [近代性](#), [Govinda Mainali](#), [入管難民法](#), [再審](#), [冤罪](#), [勾留](#), [売春](#), [外国人労働者](#), [東電 OL 殺人事件](#), [検察](#), [検察上訴](#)

鳥インフル:無防備な近郊養鶏場

ネパールで鳥インフルが拡大している。バクタプルにつづきラリトプルでも感染が確認された。

カトマンズ近郊には、人口増にともない、養鶏場が急増している。かつては放し飼いで、ニワトリも健康であり、感染してもそう深刻なことにはならなかったのだろうが、いまは無防備な養鶏場にぎっしり詰め込まれ、飼育されている。いったん感染したら急拡大することは、素人目にも明らかだ。

鳥インフルは日本や韓国でも防止しきれない。ましてやネパールでは、鶏舎の予防対策も、拡大防止行政能力も、不十分である。急速な都市化に、交通、水道、電力などの基礎インフラ同様、養鶏・畜産業もついて行けないのだ。

鳥インフルがいつ終息するか？ 長引けば、養鶏農家だけでなく都市住民にも大打撃となるであろう。

[参照] [農業現代化と動植物の権利](#)



■近郊の鶏舎(今回の鳥インフルとは無関係)

谷川昌幸(C)

2013/08/06 09:59

カテゴリー: [社会](#), [経済](#)

タグ: [養鶏](#), [鳥インフル](#), [農業](#)

紹介:『ナラク ゴビンダ・マイナリ獄中日記』(1)

いわゆる「東電 OL 殺人事件(1997年3月)」の犯人として投獄され、15年後、再審無罪となったゴビンダ・マイナリ氏の獄中日記。大学ノート18冊のネパール語日記を、東豊久・蓮見順子両氏が翻訳し、今井恭平氏が編集・整理した。収録は、上告棄却・無期懲役刑確定後の2003年6月14日から、再審無罪判決をうけ出国する前日の2012年6月14日までの日記が中心。

▼ゴビンダ・マイナリ著、今井恭平編・解説『ナラク ゴビンダ・マイナリ獄中日記』希の樹出版, 255 頁, 2013 年, 1800 円



■表紙カバー

1. 事件の概要

1997年03月08日 東電女性社員, 渋谷区のアパートで殺害。

――03月19日 殺害遺体発見。

――03月23日 ゴビンダ・マイナリ氏, 入管難民法違反(オーバーステイ, 不法残留)容疑で逮捕。

――05月20日 入管難民法違反で東京地裁, 執行猶予判決。判決後, 強盗殺人容疑で再逮捕。

――06月10日 強盗殺人罪で東京地裁に起訴。

2000年04月14日 東京地裁(大淵裁判長), 無罪判決。

――04月18日 東京地検, 控訴し再勾留要請。

――04月19日 東京地裁, 再勾留要請却下。東京高検, 東京高裁第5特別部に再勾留要請。

――04月20日 東京高裁第5特別部, 再勾留要請却下。

――05月01日 東京高検, 東京高裁第4刑事部(高木部長)に再勾留要請。

――05月08日 東京高裁第4刑事部(高木部長), 再勾留許可。

――12月22日 東京高裁(高木裁判長), 無期懲役の有罪判決

2003年10月20日 最高裁, 上告棄却。無期懲役の有罪確定。

2005年03月24日 東京高裁へ再審請求。

2012年06月07日 東京高裁, 再審開始を決定し, 刑の執行停止。入管移送。

――06月15日 マイナリ氏, 日本出国。

――11月07日 東京高裁, 控訴棄却(無罪判決)。検察上告せず, 無罪確定。

2013年02月06日 東京地裁, マイナリ氏刑事補償金 6840 万円, 決定。

2. 事件の特異性: 陰湿な癒やしの多層構造

「東電 OL 殺人事件」は, 特異なショッキングな事件であった。殺されたのは, 東京電力の「美人エリート OL (39 歳)」。平日昼間は東電管理職として働き, 退社後や土曜は, 連日, 客を取り売春をしていた。そして, 殺した犯人として逮捕

されたのは、インド料理店で働いていた出稼ぎ外国人で不法滞在(オーバーステイ)のネパール人、ゴビンダ・マイナリ氏(30歳)。

世間は、被害者女性の昼と夜のあまりの落差に驚き、また被害者と犯人の間の境遇の相違とある種の類似性の併存に興味をそそられた。人もうらやむ超一流企業の有能な美人エリート女性社員が、退社後、街娼となり、客の不法滞在ネパール人に殺された。いったいなぜ彼女はそのような二重生活に陥り、あげくは見るも無惨な姿で殺されねばならなかったのか？あるいは、不法滞在ネパール人は、路上で彼女を買い、安アパートの空き部屋で性交渉をしたあと、なぜ彼女を殺してしまったのか？

事件は、人びとの興味を異様にそそるものであり、連日、新聞、テレビ、雑誌などが被害者と犯人の経歴、行動、人間関係、あるいは彼らの心理や動機などについて、あれこれ書き立てた。それらの中には、殺された当の被害者とその家族であることを忘れたかのような暴露記事や、いわゆる「ドキュメンタリー」も少なくなかった。

この事件は、こうした特異な多層構造をもつが故に、日本人が多かれ少なかれ抱く屈折した劣等感を、隠微にして淫靡に癒やしてくれた。あの東電OLに比べれば、自分は……、あの出稼ぎネパール人に比べれば、日本人は……といった陰湿なノゾキの快楽であり、また代償的アジア蔑視の国民的自慰である。

3. 裁判の特異性:違憲の検察上訴と再勾留

「東電OL殺人事件」は、裁判としても特異で異常なものであった。

ゴビンダ・マイナリ氏は、殺された東電女性社員の売春客であったことを認め、彼女との性交渉を示す遺留証拠もあったが、殺害は一貫して否認した。

(1)再勾留の違憲性

一審の東京地裁(大淵裁判長)は、検察側の主張を退け、マイナリ氏を有罪とするだけの十分な証拠はないとして、無罪の判決を下した。マイナリ氏は、すでに入管難民法違反で懲役1年執行猶予3年の有罪判決が確定していたので、本来なら、この地裁無罪判決後、身柄を入管に移され、強制国外退去処分とされるはずであった。法もそう規定している。

憲法第34条 何人も、正当な理由がなければ、拘禁されず……

刑事訴訟法第345条 無罪……の裁判の告知があったときは、勾留状は、その効力を失う。

ところが検察は、憲法も刑事訴訟法も無視(都合よく解釈)し、身柄確保のため再勾留を要請した。再勾留要請→東京地裁却下→東京高裁第5特別部却下→東京高裁第4刑事部(高木部長)許可。この経過を見ただけでも、検察の再勾留要請がいかに強引であったかは、明白だ。無罪判決後の再勾留は、憲法違反であり、外国人差別であり、国際人権法違反である。

検察は、この強引な再勾留で身柄を確保しつつ、東京高裁(高木裁判長)に控訴、以後、裁判は検察ペースで進み、2000年12月、東京高裁(高木裁判長)で無期懲役の有罪判決が下され、この判決が2003年10月、最高裁上告棄却により確定したのである。

(2) 検察上訴の違憲性

この「東電 OL 殺人事件」の捜査・裁判過程には、別件逮捕、通訳なしなどの強引な取り調べ、犯行と矛盾する証拠の無視、重要証拠の非開示など、様々な問題があるが、最も根本的な問題は、再勾留の根拠ともされている検察上訴そのものである。憲法は次のように定めている。

憲法第 39 条 何人も、……すでに無罪とされた行為については、刑事上の責任を問はれない。

ここでいう「無罪」は、一審であれ二審であれ、裁判所の下した「無罪」判決である。ところが、最高裁も検察も、これを勝手に「確定裁判による無罪」と読み替え、無罪判決を不服とする検察上訴を続けてきた。

この検察上訴が違憲であることは、いうまでもない。常識(common sense)で考えても、それが**正義(justice)**に反することは明白だ。「justice」は「裁判」であり「裁判官」でもあるから、検察上訴を容認する裁判所や裁判官は、「正義」の常識を持たない非常識なニセ裁判所、ニセ裁判官ということになる。憲法はこうも定めている。

憲法第 37 条 すべて刑事事件においては、被告人は、公平な裁判所の迅速な公開裁判を受ける権利を有する。

そもそも刑事裁判の被告と検察・裁判所は、ほとんどの点で対等ではない。被告は限られた人生を生き、証拠収集のための能力や資金力もごく限られている。これに対し、検察や裁判所は、機関・組織であり、それら自体は、無限に存続する(と想定されている)。証拠収集のための権限や経費も、被告側とは比較にならないほど大きい。

被告にとって時は金であり取り返しのつかない人生そのものだが、機関・組織としての検察や裁判所にとっては、時間などまったく問題にならない。必要なら 100 年かけても千年かけても、かまわないわけだ。

この明白な差違も憲法の迅速裁判規定も無視し、あたかも被告と検察官が公平な裁判官の前で裁きを受け、敗訴の場合は、被告側と同様、検察側にも上訴の権利があるなどと強弁するのは、いかに法技術的に洗練(sophisticate)されていようが、三百代言の詭弁(sophism)であり、偽善(hypocrisy)であり、そして、もちろん違憲である。

いうまでもないことだが、一審無罪判決は、警察・検察が強大な捜査権限を行使して捜査したにもかかわらず、有罪にするだけの証拠を法廷に提出できなかった結果に他ならない。無罪判決には、被告側の責任は全くない。検察上訴は、結果に対してまったく責任のない被告側を、全責任を負うべき側が訴えることであり、明らかに正義に反する。現代の三百代言ソフィストならいざ知らず、健全な常識を持つ人であれば誰でも、検察上訴裁判を**正義＝裁判(justice)**とは認めないだろう。

(3) 真実解明よりも有罪優先

日本の検察は、真実(真の犯罪事実)の解明よりも、被告を有罪にすることを優先させている。そのためマイナリ裁判でも、検察は捜査で収集した証拠のうち、検察に不利なものは開示しなかった。

常識では、これは正義(justice)に反する。だから**不都合な真実**を隠して行われた裁判は、本当の裁判(justice)ではなかった。15 年後の段階になってようやく、検察が隠していた証拠が弁護団の粘り強い努力により開示され、それらの鑑定により明らかとなった真実(真の犯罪事実)により、マイナリ氏は無罪となった。

この間の15年は、検察にとっても裁判所にとっても、屁のようなもので、痛くも痒くもない。しかしマイナリ氏にとって、1997年(30歳)から2012年(45歳)までの15年間は、本来なら最も充実した壮年期のはず。だが、もはや取り戻しようもない。このような結果は、断じて正義=裁判(justice)ではない。(未完)

→ [紹介:『ナラク ゴビンダ・マイナリ獄中日記』\(2\)](#)

[参照]

[ゴビンダ冤罪批判、カトマンズポスト社説](#)

[ゴビンダさんの冤罪と日本社会の責任](#)

[ゴビンダ・マイナリ氏の再審・無罪判決を](#)

[獄中のゴビンダ氏と「支える会」](#)

[紹介『東電OL事件:DNAが暴いた闇』](#)

[東電OL殺人事件, 日弁連会長声明\(転載\)](#)

[東電OL殺人事件, 再審決定](#)

[Justice for Govinda Mainali jailed in Japan](#)

谷川昌幸(C)

2013/08/05 19:13

カテゴリー: [司法](#), [憲法](#), [本](#), [人権](#)

タグ: [迅速な裁判](#), [Govinda Mainali](#), [入管難民法](#), [再審](#), [勾留](#), [売春](#), [外国人労働者](#), [東電OL殺人事件](#), [検察](#), [検察上訴](#)

京都の米軍基地(14):受け入れ方針合意

京都新聞他各紙によれば、京都府知事と京丹後市長が1日、Xバンドレーダー配備について協議した。

中山京丹後市長:「問われているのは国益。住民の安心安全が確保されれば協力するのはむしろ道理」(京都新聞8月2日)

山田京都府知事:「京丹後市の意向が非常に重要。府議会の意見もいただきながら対応したい」(京都新聞8月2日)

朝日新聞(8月2日):「北朝鮮のミサイル発射に備えたいとする日米政府の意向を踏まえ、山田知事らは『国家の問題を地方として尊重する』と判断した。」

これらの記事が正しいとすると、「米政府→日本政府→京都府・京丹後市→地元住民」ということになり、論理があべこべ。

京丹後市住民にとって、**国益**など二の次、ましてやアメリカ国家の安全など三の次だ。まずは**自分と家族と近隣の安全**。それをどう守るか?

東京や大阪の電力が足りないからといって原発を受け入れ、土地がないからといってゴミ処理場を引き受ける。東京や大阪やアメリカのことは、彼らの問題であり、原発やゴミ処理場や X バンドレーダーが彼らにとって必要なら、都市部やアメリカに設置させよ。

民主主義は、もともと個々人が生きる自由をもち、何よりもまずそれを主張するのは当然の権利だ、という考え方を大原則としている。国益なんかこの次、ましてやアメリカ国益なんかアメリカ人が考えればよいこと。「**国家の問題を地方として尊重する**」のは、本末転倒。

人権と民主主義の原則に立つなら、臆せず、断固こう主張すべきだ。「**地方の問題を国家として尊重する**」



■米軍 X バンドレーダー(US Navy HP)

【資料追加:[京都米軍基地・年表](#)】

- ・電磁波の影響に関する府参事会意見(2013 年 7 月)
- ・参議院井上議員質問への答弁書(第 143 号)

【参照】

- ・[京都の米軍基地\(1\)-\(13\)](#)

谷川昌幸(C)

2013/08/02 10:45

カテゴリ: [軍事](#), [平和](#), [民主主義](#), [人権](#)

タグ: [米軍基地](#), [経ヶ岬](#), [X バンドレーダー](#), [国益](#), [丹後](#), [京丹後](#)